

譚水風

創刊号



蒙談会発行

風水譚について

柴田 眼治

蒙談―山水蒙

中国の古典、四書五經の一つに易經（周易）がある。蒙談は「蒙（山水蒙）」の卦から採られた。

蒙は童蒙といい、幼稚蒙昧の象。教育により、その蒙が啓かれる。童蒙から進んで師に教えを求めることがよい。蒙求とはこのことを指す。また山の下に湧き出る泉を蒙という。障害をつき破り、流れて息まない水の姿と、静止して動揺することのない山容にのっとり君子は果敢に行動し道徳を涵養するのである。蒙談会同人は自らを「蒙」に例えて論談し、投稿したのだった。

金本翁主宰の蒙談は四十一号で終刊となったが、蒙談会は継続し、新誌名で刊行することになった。

風水譚―水風井

易經の下巻に「井（水風井）」の卦がある。清水を湛えた井のことである。井戸の清水は汲めども盡き

ない。村邑は遷りかわっても往来の人々は風の如く来たりて、自由に井戸の水を汲み、喉をうるおすことができる。井水は人間の生活に欠かせないがその恩恵は普段は忘れられている。山水蒙すなわち山麓の水は伏流して清冽な井水となる。井戸は無数の人々を養う力がある。同人誌の新書名「風水譚」ふうすいたんは水風の井の卦から、風水を採り命名された。譚はお話、物語の意である。筆者と読者の関係は風に例えられる。寄せられた方の原稿を井戸の清水にたとえて、読者に益することを期待しての誌名となった。



井 風 水

参考文献

易经(上・下) 高田真治・後藤基巳訳 岩波文庫

易经(中国の思想) 丸山松幸訳 徳間書店

四書…論語 大学 中庸 孟子

五経…易经 書経 詩経 札記 春秋

楽経を含めて六経という

大内氏と高野山

平成十八年五月五日、家族四名と高野山へお詣りした。関西鍼灸大学の上田至宏教授の車に乗せてもらいご案内して頂いた。先生はアメリカ、コロンビア大学に留学研究され、アルバート・アインシュタイン大学准教授で血液のヘモグロビンの生理学的研究をされてきた。西洋医学の分析学に飽き足らず、人間を全体としてみる東洋医学に視野を向け、帰朝後、同大学の情報センター長をしておられる。日本統合医療学会で親しくしていただいているが、先生は弘法大師の密教についても深く考究され「曼荼羅」の医学的解明ではユニークで大変に愉快な方である。



三輪山麓にて、向かって右 上田教授
左 筆者

柴
田
眼
治

四日はお住まいの宇治、纏向（まきむく）、三輪山と巡り、橋本の「ゆの里」に宿泊。社長さんの説明では、地下千メートルまでボーリングしたところ、古代海洋水と似た成分の温泉が出た。沢山の人が湯治や神秘の水「月のしずく」を求めて訪れていた。皮膚病や内臓疾患に効くと有名になっている。夕食で一杯やって現代医学とお大師さんの話などに話が弾んだ。翌朝、弘法大師を高野山に案内した狩場明神の旧蹟のお宮を案内してもらい、さらに隅田八幡の国宝の人物画像鏡の説明文を見て興味深かった。朝食は神秘水で調理されたご飯やおかずで、美味しかった。高野山麓の慈尊院にお詣りしたが、ここは弘法大師の母君と弥勒菩薩がお祀りされている。

胎藏界の百八十番町石が階段途中の右手にあった。新緑が朝日に映えて美しい。九度山の真田六文銭の幟を見て山上へ一気に登って、ケーブル



慈 尊 院



満開の枝垂桜・5月5日
の山上は下界よりは遅い



高野山成慶院

カー組と合流し大門へ。大門は修復工事中だった。丹生都比売神社、根本大塔や金堂を巡拝した。

今日は一年に一回の結縁灌頂の日で多くの人々が山上伽藍を参詣していた。霊宝館の西側にめざす成慶院があった。明治以来、無住となり、向いの櫻池（ようち）院の管理となっている。インターネットで調べると防州大内家や武田信玄公の位牌があるとのこと、今回の訪問となった。

近藤清石著「大内氏實録」によると

「文応元年（一二六〇）康申 七月十八日

高野山成慶院牌 孝子大宮太郎弘家

為父建之 父弘貞。

正平十一年（一三四七）丙申秋九月廿一日

大内弘世 父弘幸の牌を高野山成慶院に建つ

至徳三年（一三八六）戊辰夏 六月十五日

大内義弘 父弘世の牌を高野山成慶院に建つ

応永二十四年（一四一七）丁酉春 三月廿二日

大内盛見 兄義弘の牌を高野山成慶院に建つ

文安元年（一四四四）甲子春 二月廿八日

大内教弘 養父持世の牌を高野山成慶院に建つ

天文元年（一五三二）十一月廿日

大内義隆 父義興の牌を高野山成慶院に建つ

とあって、当時大内弘貞、弘幸、弘世、義弘、持世、義興の位牌が成慶院に祀られたことが分かる。

成慶院を管理している向いの桜池院に案内を乞う。出迎えた寺僧のお話では「大内家の位牌は成慶院から引き継いでいますが何処にあるか、今は分かりません。住職は百歳を超え、病臥中で、残念ながら、詳しいことは不明です。」とのことだった。寺僧に位牌堂でお経をあげ、戒名を唱えて貰い、一同焼香をして桜池院を辞した。寺僧の話では数年前に山口大学教育学部の先生が泊りがけで調べ



桜池院山門



桜池院位牌堂

られたが不明だったようだ。のちに位牌を求めて大内持世の直系の千葉の大内公夫氏が訪ねられたが、やはり不明だった由。

武田信玄公の霊牌が安置されていた。当院は宿坊となっており、精進料理も予約できる。

一同、歩いて奥の院を参詣した。巨大な諸大名の五輪塔や現代の各会社の社員慰霊碑が林立していた。

数多くの消えずの灯明、貧女の一灯や昭和灯を見て、その奥の弘法大師の生きつづけておられるという奥の院を拝んで帰途についた。

上田先生とは高野山駅でお別れをして、私たちは極楽橋から近鉄で大阪に出て、新幹線で山口に帰った。室町時代に高野山へ山口から往復したのはさぞかし大変だったと思った。



織田信長など歴史上の人物の五輪供養塔が林立している



高野山奥の院

むすび

高野山成慶院に祀られた大内弘貞は蒙古襲来の際には参戦し活躍したと伝えられる。大内弘幸は妙見菩薩のお告げにより大森銀山を発見したと伝えられる。

弘世は大内諸氏を統一し、京にのぼった。義弘は南北朝合一を斡旋した。のちに將軍足利義満と戦って堺に戦死している。彼は高野山のある紀州の守護であった。盛見は筑前深江で戦死している。持世は嘉吉の変で没している。大内義興は幕府管領代になり、京都に平穩をもたらした。周防、長門、豊前、筑前、石見、安芸、山城七ヶ国の守護であった。皆、夫々に山口に菩提寺があるが、更なる往生を願って高野山に位牌を祀ったのだろう。特に大内義弘、盛見、持世については悲運の最後であって手厚く祀る必要性があったと推察されるのである。



高野山山上伽藍

大内歴代は篤い孝養心と弥勒下生まで空海上人と共に靈山に留まるという大師信仰の心を持っていたことが実感できた旅だった

大内氏の大業―伊勢勧請

八田 ひろいち

山口大神宮は大内義興によって永正十七年（一五二〇）に後柏原天皇の勅許を得て伊勢神宮の分霊を勧請し、鴻峰山麓に新社殿が造営された。当時の伊勢の状況は内宮は五十七年前の寛正二年（一四六三）以来、式年遷宮は行われておらず、外宮は八十五年前の永享六年（一四三五）以来、遷宮はない有様だった。南北朝や応仁の乱と続く戦国の時代は朝野を疲弊させて伊勢は荒廢の真只中であつた。二十年ごとの式年遷宮を行う莫大な費用は宮中や神宮も幕府にもなかった。神宮、内宮の弥宜 荒木田守武の日記には「本殿や宝殿も萱の屋根が腐り、千木・鯉木は地に落ち、雨漏りして中に納めた神宝は痛み、柱も傾いている。新嘗祭に昇殿する弥宜の奉仕も危

険で今度、大風が吹けば神殿は転倒するかも知れない。」と誌している。応仁の乱で朝廷は著しく衰微し、幕府は財政逼迫。仮殿遷宮する費用もなく、参宮道に關所を増設して、造営費にあてたが、かえって参拝者は減つた。神宮は愈々荒廢し、宇治橋も大水で流れた。戦火で外宮が炎上し、内宮は永正十年（一五一一）に玉垣、宮殿が炎上した。軒は落ち、柱も傾く仮殿を仰いでは「神慮はかりがたし」とひれ伏した神主たちの嘆きは神宮の歴史で最も悲痛な記録であつたという。内宮は一三三年間、外宮は一二九年間遷宮は行われなかった。

大内義興が幕府政所執事で武家故実家の伊勢貞陸に装束や式法などを尋ねて神宮を参拝したのが永正

十三年（一五一七）のことだった。内宮、外宮とも荒れ果てており、神域の惨状は敬神の念篤い義興の心を痛めたことと思われる。当時、義興は幕府管領代だったので神宮の神職や関係者達からの式年遷宮への悲痛な訴えが数多く寄せられたと推察される。義興はこの四年後の永正十七年に山口に伊勢の勧請を達成した。分霊とはいえ伊勢の大神は山口の社に降臨されたのである。山口勧請後、伊勢では内宮は六十九年後の天正十三年に、外宮は四十七年後の永禄六年に本宮の式年遷宮は復活したのである。慶光院上人など勧進につとめた女人の力も大きく、式年遷宮は織田信長や豊臣秀吉らの時代を待たねばならなかった。中世の乱世にあつて、大内氏は伊勢神宮の絶えんとする灯を中継ぎするという大業を成し遂げたのである。すなわち中世の日本で唯一、伊勢の神明が輝いていたのは山口の地であつたのである。



伊勢神宮内宮正殿



山口大神宮 内宮

神宮式年遷宮

内宮

寛正三年（一四六三）四十回—天正十三年（一五八六）

四十一回

外宮

永享六年（一四三五）三十九回—永録六年（一五六四）

四十回

参考文献

伊勢神宮（写真）

石丸 泰博 岩波書店

伊勢神宮

桜井 勝之進 著 学生社

伊勢神宮

矢野 憲一 著 角川書店